埋文にいがた

MAIBUN

新潟県埋蔵文化財センター
MAIBUN NIIGATA
2021 Nov.
第116号

発掘調査整理遺跡紹介

上越市 下割遺跡　整理作業 X線CTの利用

わが町の文化財紹介（胎内市）

南魚沼市 金屋遺跡 令和３年９月
平安時代 集落

2021年度
発掘調査
遺跡の紹介

下割遺跡Ⅸ
縄文時代後期の集落

所在地：上越市米岡・北田中・鶴町地内

下割遺跡は高田平野の中央、飯田川左岸の標高約14mの微高地にあります。国道253号上越三和道路建設に伴い、平成14年からこれまで９回の発掘調査を行っています。令和３年度は市道予定部分の東側の一部（延長50m）と西側の橋脚６か所（A1、P1、P3～P6と呼ぶ）を調査しました。

昨年度の調査では、遺跡は上から中・近世の水田域とその西側に屋敷地、奈良・平安時代の集落と畠と自然流路、古墳時代は前期の溝と後期の焼土・土器集中地点を検出し、調査を終えました。本年度は４層目の縄文時代後期前葉（今から約4,000年前）の調査が主体で、調査過程を追ってP3～P6の４つの調査区について報告します。

P6では、遺物包含層の掘削後に土坑８基を検出しました。平面形が円形のものが多く、最大のものは直径約1.7m、深さは約0.7mあります。多くは調査区の西側に位置します。遺物は遺構の周辺から縄文土器が出土し、土坑SK6305からはアスファルト塊も出土しました。また、調査区南西隅では包含層の上位から、加曽利Ｂ式土器が出土しました。これは縄文時代後期中葉のものであり、前葉から中葉にかけての長期間にわたり人々が生活していた可能性があります。

P5では、合計40基の遺構を検出しました。調査区の南辺中央付近には立ち枯れたと思われる樹木根があり、検出した遺構はこれを囲むように調査区全体に位置します。遺物は、後期前葉・堀之内２式土器の注口土器などの縄文土器のほか、土偶（頭部・体部）、男性器を象ったといわれる石棒、磨製石斧や石鏃などの石器が多数出土しました。また、ヒスイ製敲石も１点出土しました。

P3は、調査区全体が洪水によって流れてきたと思われる砂で覆われていました。砂を掘り下げたところ、南側にわずかに陸地だったと考えられるか所があり、土坑２基を検出しました。遺物は凹石１点と少量の縄文土器のみの出土で、多くは洪水によって流されたと思われます。また、これらを確認した陸地以外の部分は河川跡と思われます。砂は最深部で約１mにわたり堆積し、遺物の出土がないことから、勢いよく水が流れたことが推測されます。

P4は現在調査中で、遺物包含層の上部からは加曽利Ｂ式、下部からは堀之内式土器の出土が多く、特に注口土器が目立ち、小型の土偶（体部）や、残存長約40cmの石棒、立石、ヒスイ、磨製石斧、石鏃などの石器があります。

本年度の調査で、縄文時代の集落が地表下４mに存在することが分かりました。上越地方の丘陵部には縄文時代の遺跡の存在が多く知られていましたが、高田平野では初めての成果です。調査区が限定的なため住居などの建物跡が見つかっていませんが、土偶や石棒などマツリに関係する遺物が多く出土したことから、ムラの人々は普段の生活を送る中で、子孫繁栄や傷病平癒などを祈り、日々を過ごしていたと思われます。

（（株）ノガミ　細田尚克）

縄文時代後期前葉　注口土器

縄文時代後期前葉　ハート形土偶頭部

2021年度
発掘調査
遺跡の紹介

山口遺跡

所在地：阿賀野市山口字城ヶ窪2887ほか

山口遺跡は、JR水原駅の西、約1.5kmにあり、阿賀野川や旧小里川によって形成された標高約６ｍの自然堤防に立地します。国道49号阿賀野バイパスの建設工事に伴い、平成20・22・25年に合計25,502㎡（複数層の合計）を発掘調査し、弥生時代・古代（平安時代）・中世の遺構・遺物が見つかっています。古代では、一般的な集落では数少ない総柱建物を中心とし、方位に軸を合わせた建物群からなる居住域を形成していたことがわかっています。また、県内では初例となる、希少な舶載品である唐三彩が出土しています。

今年度は、バイパスの両脇に設置される水路部分3,197㎡を調査し、古代では竪穴建物、土坑、溝などの検出に加え、居住域より標高が若干低い東側に水田が広がっていたことを確認しました。阿賀野市内で古代の水田が見つかったのは初めてです。

水田域では大小の畦畔（あぜ）が７条と、幅約7.5mの溝が見つかっており、それぞれ平行・直交の関係にあります。畦畔には南北を指すものがあり、方位を意識している可能性が考えられます。特に、水田域西側に位置し、居住域へ伸びると思われる幅広の畦畔は、土質がほかのものと異なり、非常に固くしまっています。このことから、畦畔構築時に、改良した土を盛り上げ、突き固める舗装工事をしていたと考えられます。水田の区画のみでなく、道路としての利用が想定できます。

古代集落において、居住域と水田がセットで見つかった貴重な事例です。これまでと今年度の調査成果から、山口遺跡には相当な有力者がいたものと考えられます。そうした有力者が水田開発を行ったことを明確にすることができた点が大きな成果です。

（（株）吉田建設　伊藤正志）

溝と水田

水田と幅広の畦畔

畦畔の断面

2021年度
整理作業
から

X線CT装置で解き明かす土器のひみつ

所在地：南魚沼市余川地内

写真１は、現在整理作業を進めている南魚沼市坂之上遺跡から出土した「高杯」と呼ばれる土器です。おおよそ1,500年前（古墳時代後期）に作られた当時の食器で、お椀に短い脚が付けられているのが特徴です。

弥生時代に定着した高杯はもともと共用器といって、複数の人が一つの器を共用するものでした（佐原1996）。しかし、徐々に小型化していき、この頃には、銘々器（個人用）である椀に短い脚が付いた形態に変化します。さらにこの頃の高杯には、同じ時期の椀にみられる「内面黒色処理」と呼ばれる水漏れ防止の工夫がなされています。このことから、少なくともこの時期にはお椀とともに高杯が銘々器として、ごはん茶碗もしくはオカズ用の器として使用されたと考えられます。

さてこの高杯ですが、おそらく上部のお椀部分と下部の脚部分を別々に作ってから、二つを接合させて仕上げていると考えました。ただ、この土器を観察していて一つ疑問が浮かんできました。高杯をみるとお椀部分と脚部分の接合部分はきれいにナデ調整が施されて、継ぎ目のようなものは確認できません。ですが、いくら外面をきれいに整えたところで、別々に作ったパーツを貼り付けただけでは、脚が簡単に外れてしまわないでしょうか。日常食器として使用するには些か不安を覚えざるを得ません。そこで、この疑問を解決するために土器の「内側」をX線CT装置で覗いてみることにしました。この装置は、X線をさまざまな角度から照射することで、モノの内部構造を知ることができる便利なものです。写真２・３は、高杯を輪切り状に観察した様子ですが、お椀と脚部の接合部分に刻み目のようなものが見えます。おそらく、ヘラのようなもので接合面に刻み目を入れることで、接合時の摩擦力を高める狙いがあったと考えられます。まさに古墳時代人の知恵の一端を垣間見ることができた貴重な機会となりました。

考古学は地味で地道な作業というイメージですが、時には現代科学をうまく活用して謎を解き明かします。（田中祐樹）

写真１　坂之上遺跡の高杯（古墳時代後期）

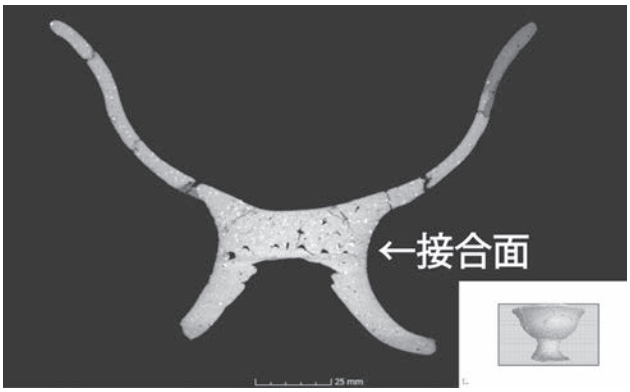


写真２　X線CT装置で見た高杯の断面１

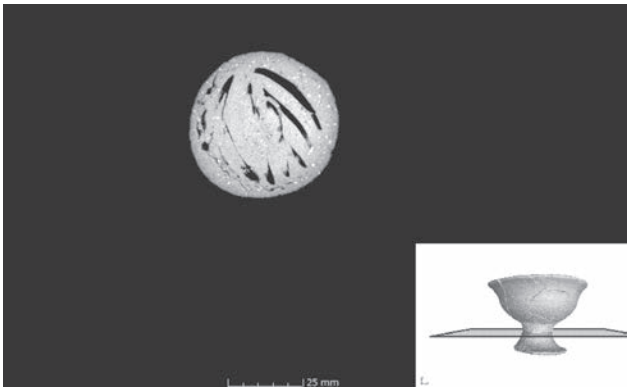


写真３　X線CT装置で見た高杯脚部の接合面

X線CT装置の利用にあたっては、新潟県工業技術総合研究所 下越技術支援センター 中部昇氏にご協力いただきました。

参考文献

佐原真1996『食の考古学』東京大学出版会

埋文
インフォ
メーション

令和３年度 秋季企画展
倭国大乱～律令国家成立までの越後平野

現在の村上市から長岡市にかけて広がり、本州日本海側では最大の面積を誇る越後平野。中国の歴史書に、大いに乱れた倭国を邪馬台国の女王・卑弥呼が鎮めたと記された弥生時代後期（２世紀後半）から、律令国家が成立したとされる８世紀の直前まで、越後平野はどのような歩みをたどったのか。最新の発掘調査を踏まえ、この地域の重要性に迫るのが本企画展です。

この時代は、西日本でも近畿地方（畿内とも呼ばれる）が中心地とされています。西日本の情報が直接伝わる日本海側最北の地が、新潟県の中でも越後平野で、主に下記のものがあります。

弥生時代：戦いに備えたとされる高地性集落・環濠集落（村上市山元遺跡）

古墳時代：最も格が高いとされる前方後円墳（新潟市菖蒲塚古墳・（仮称）角田浜妙光寺古墳）

飛鳥時代：北方の勢力に備えた軍事施設とされる渟足柵・磐舟柵（未発見）

新潟県のもう一つの特徴は、北方社会の情報が伝わる日本海側最南地の時期が多いことです。これは、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、続縄文土器と呼ばれる北海道由来の土器が出土する日本海側最南地であったことからも裏付けられます。西方社会からみれば日本海側最北地、北方社会からみれば日本海側最南地で、特に越後平野はその傾向が強い地域でした。

今回の企画展は、新潟市文化財センターと共催し、第１会場・新潟県埋蔵文化財センターと第２会場・史跡古津八幡山 弥生の丘展示館で700点程の出土品を展示しています。第２会場では新潟市の資料を、第１会場では県が発掘調査したものに加え、村上市・胎内市・新発田市・新潟市・阿賀野市・加茂市・田上町・三条市・長岡市・新潟大学考古学研究室の協力を得て、県・市指定品を含む選りすぐりの品を展示しました。日本の国が成立する過程で、西（南）方、北（東）の情報が交差する越後平野の重要性を第１・２会場で感じていただければ幸いです。（滝沢規朗）

期　日：令和３年12月12日（日）まで

観覧料：無料

開館時間・休館日

第１会場：新潟県埋蔵文化財センター
　９：00～17：00　期間中休館日なし

第２会場：史跡古津八幡山 弥生の丘展示館
　10：00～17：00　休館日は毎週月曜日・祝日の翌日。月曜日が祝日の場合は翌日

写真１　東北系の弥生土器・壺
（村上市 砂山遺跡 市指定）

写真２　飛鳥時代の銅製・鈴（左）と耳環（右）
（田上町 行屋崎遺跡 県指定）

埋文
コラム

子持勾玉について

大型の勾玉の表面に小さな勾玉がいくつかついたもので、滑石などの軟らかい石材を用いて作られます。子持勾玉は江戸時代「石剣頭」と呼ばれており、そのころから存在は知られていました。「石剣頭」とは刀剣の柄頭のことで、「玉」と認識されたのは明治時代に入ってからのことです。子持勾玉は５世紀中ごろに出現し７世紀にかけてみられます。祭祀遺跡や古墳、あるいは単独で出土し、東北地方から九州、朝鮮半島南部まで幅広く分布しています。勾玉の背部に３～５個、両側面に２～４個、腹部に１個の子勾玉を持つものが基本形であり、子勾玉の形はきれいな勾玉の形になっているものから方形やボタン状になっているもの、子勾玉がくっついて連続しているものなど、いろいろなバリエーションがあります。鋸歯文を刻むものや竹管状円圏文がつくものもあり、出土する地域により様々な姿を見せてくれる遺物です。その使用方法はまだわかっていませんが、小さな子勾玉がいくつも付属する形状から増殖に関する呪術的な遺物とされています。

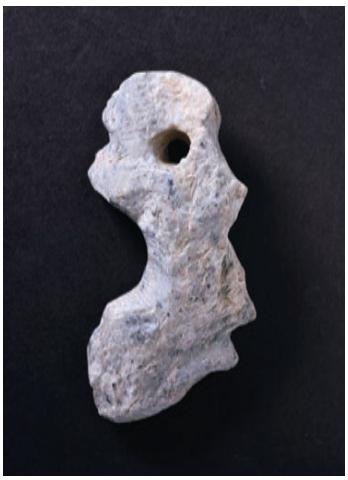
さて、全国には様々な形状の子持勾玉がありますが、新潟県ではどのような形があるのでしょうか。新潟県内では10遺跡から子持勾玉が確認されています。佐渡を含む日本海側に沿って出土しており、内陸側では確認されていません。県内の10遺跡の中から３例を紹介します。

阿賀野市腰廻遺跡出土の子持勾玉は長さ7.4cm、幅3.5cmの大きさで、背部に２個、側面にそれぞれ２個、腹部に１個の計７個の子勾玉がついています。この子持勾玉の特徴は子勾玉が独立しており、子勾玉の形状は勾玉の形をしています。一方、上越市一之口遺跡の子持勾玉では子勾玉の形状が少し違います。長さ7.5cm、幅３cmの大きさで背部に６個、側面に３個、腹部に１個の計10個の子勾玉がついています。腰廻遺跡と異なる点は腹部以外の子勾玉が方形で連続していることです。新潟県の子持勾玉は、下越から上越や佐渡まで幅広く分布していますが、この方形で連続している子勾玉をもつ子持勾玉は糸魚川市の六反田南遺跡を含めて上越地方の南西部に多く分布しており、下越ではまだ発見されていません。新潟県の子持勾玉の６割以上が表採や単独出土のため、年代がわからないものが多いのですが、子勾玉の形状と分布傾向を他県と比較することで、今後新たな発見ができるかもしれません。

現在開催中の秋季企画展「倭国大乱～律令国家成立までの越後平野」では、腰廻遺跡の子持勾玉が展示されています。また、常設展示室では一之口遺跡の子持勾玉も展示しています。この２つの子持勾玉を比較できる絶好のチャンスなのでぜひ、お越しください。　（中島愛理）

腰廻遺跡

一之口遺跡



六反田南遺跡

埋文
コラム

わが町の文化財紹介 －胎内市－
分谷地Ａ遺跡

日本を代表する縄文時代の漆器として国内の国立、県立博物館のみならず、フランスのパリ日本文化会館など海外でも展示された、赤と黒の優美な水差し形容器が胎内市にあります。

この漆器は、飯豊連峰を源とする胎内川流域の胎内市熱田坂分谷地の河岸段丘上標高100mにある縄文時代後期の集落遺跡「分谷地Ａ遺跡」から発見されました。住居のすぐ側、湧水のみられる崖斜面からは、役割の終えた土器や石器、土偶などを廃棄した捨て場遺構がみつかり、この中に冷たい地下水でパックされた状態で漆器類35点が当時のまま色鮮やかに発見されました。中でも、セットでみつかった幅26cm、高さ15cmの大きさの赤と黒の水差し形容器は、ヤマザクラ材を刳りぬき薄く丁寧に作られた、左右均整のとれた美しい曲線の優品であり、全国でもこのような完全な形のものは極めて珍しいといえます。

黒色の漆器はクロメ漆（着色していない漆）が塗られ、赤色の漆器はクロメ漆、ベンガラで着色した赤色の漆、水銀朱で着色した朱漆の３種を塗り重ねています。また、黒色の漆器に入っていた土を科学的に分析したところニワトコ、サルナシ、ヤマグワなど14種の種実がみられ、果実酒をベースにした飲料が入っていた可能性が高いことも分かりました。

平成14年には遺跡の一部が村の文化財として保存され、平成15年には縄文時代の木工や漆工芸の高い技術水準を示す、この赤と黒の漆器の優品をはじめ木製の鉢や糸玉、朱漆塗り土製耳飾りなど21点が新潟県の指定文化財となりました。

現在遺跡はボランティアの方々により、定期的に水質調査、草刈整備作業が行われ、市民協働で胎内市の大切な場所「縄文の清水公園」として地域総がかりで守られています。

この分谷地Ａ遺跡の魅力や価値を紹介する施設である「黒川郷土文化伝習館」と「胎内市美術館」は共に「道の駅胎内」エリアにあります。「黒川郷土文化伝習館」では分谷地Ａ遺跡から出土した縄文時代の漆器や、土偶や耳飾り、土器・石器など数多くの遺物が展示され、ビデオやパネルなどで遺跡の紹介も行われています。また市内の縄文時代の低湿地遺跡から発見された貴重な漆製品、編み物類などの貴重な遺物も併せて展示しています。火起こし、弓矢、勾玉づくりなど縄文時代の生活体験コーナーも充実し、親子で気軽に楽しむことができる施設です。

分谷地Ａ遺跡の見学の際は、「黒川郷土文化伝習館」・「胎内市美術館」にも是非、お立ち寄りください。両館ともに有料です。詳しくは市の公式ホームページをご覧ください。

https://www.city.tainai.niigata.jp/

（胎内市教育委員会　伊東 崇）

分谷地Ａ遺跡から出土した縄文漆器　県指定

現在も冷たい清水が湧き続ける分谷地Ａ遺跡

県内の遺跡・遺物114

城の山古墳

平成31年2月26日　国史跡指定
遺跡所在地：胎内市大塚
遺物保管：胎内市

城の山古墳は、今から1,700年前の古墳時代前期の古墳です。水田の広がる新潟県北部の平野に立地し、JR羽越線の車窓からも眺められ、また「ひとかご山」伝説等によって多くの市民に知られる遺跡です。2005年（平成24年）の胎内市教育委員会による発掘調査では、畿内（大阪、奈良、京都、兵庫の一部）の大和政権の古墳に匹敵する貴重な副葬品が発見され、新潟の歴史のみならず日本史の通説を塗り替えました。

日本海沿岸最北部に位置し墳丘は中世に削平されていますが、東西約41メートル、南北約35メートル、高さ約５mの円墳で、新潟県内に現存する古墳の中では３番目の大きさを誇ります。墳丘頂上の墓坑からは大木を刳りぬいて作られた長さ８mにもおよぶ巨大な舟形の木棺が発見されました。

棺の中は三つの部屋に仕切られ、上部では「鉄斧等の工具類」、中央部の被葬者付近からは「鉄製の大刀と剣各１点、赤と黒の弓各１点、銅鏃６点といった武器類」と「中国製の銅鏡１枚、糸魚川市産の翡翠製勾玉１点、緑色凝灰岩製の管玉９点、ガラス製小玉113点といった装身具」が発見されました。中でも矢を入れて背負う道具である漆塗りの靫３点が、極めて良好な状態で発見された例は全国初のことです。

城の山古墳は大和政権と北方世界が交わる境界の地に位置し、会津から越後内陸部、日本海へと通ずる阿賀野川水上交通の要衝といえます。このことから大和政権の北方政策にとって胎内市は重要な場所といえ、畿内の古墳と同様な装身具類、武器類、工具類がセットで発見されたことは、城の山古墳の被葬者（地域のリーダー）と大和政権との深い関わりを示すものといえます。

胎内市では、木棺の実物大復元シートや精巧な出土品のレプリカなどを活用して、出前授業や校外学習の受け入れをしています。また古墳を将来にわたり適切に保存していくため整備基本計画の策定作業を進めています。今後は城の山古墳を中心に散策会などを実施し、多くの方々に城の山古墳の魅力や価値をより知っていただけるよう努めていきたいと思います。城の山古墳の詳細は市の公式ホームページをご覧ください。

https://www.city.tainai.niigata.jp/

（胎内市教育委員会　伊東 崇）

城の山古墳　棺内出土遺物集合写真

埋文にいがた 第116号　令和３年11月26日発行
発行　新潟県埋蔵文化財センター　Niigata Prefecture Archaeological Research Center
指定管理者：公益財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地１　TEL：(0250)25-3981　FAX：(0250)25-3986
E-mail：niigata@maibun.net　URL：https://www.maibun.net/
『埋文にいがた』のバックナンバーは（公財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 HP でご覧いただけます。
上の URL からご確認ください。